

エンジニアパーク

Engineer



細川 浩司 農業部門（農業土木）

勤務先：株式会社ルーラルエンジニア 本店 TEL：0164-26-3411

北海道帯広農業高等学校を卒業後、農業土木技術者を目指し就職。主に宗谷、十勝、網走方面の草地整備、農道整備、家畜糞尿処理施設関係の測量設計業務を担当。気が付けば20年が経ち現在メタボ予備軍。こんな私は、自分の生活や仕事の拠点とする深川市を良く知らない事に気づき、単純な私は、深川市の主要産業である稲作から深川市を知ろうと考え、休日を利用して稲作体験に出かけています。作業は、ドロ通し、種まき、田植えの一部作業。どの作業も肉体的に厳しく体力には少し自信があった私ですが、毎度汗だくで作業終了の夕方にはヨロヨロと歩くだらしな私です。が！作業体験をお願いした立場でありながら報酬はしっかりと頂きます。それは、休憩時間のおやつと農家の方からの体験談や現在の状況など貴重な話しをお腹いっぱい頂きます。全ての経営が、経営規模拡大、大型機械化のみで優良化するような簡単なものではない事を実感しました。お世話になっている農家は担い手もあり優良農家であるが、近隣農家の厳しい現状も耳にした。深川を知る事から始まった稲作体験も、いつの間にか農業土木技術者への重要な研修の場となっていました。こんなたよりない私ですが、今後もいろいろな体験を通し、さまざまな観点から農業を知り、日本の食生活を支える重要な役割を担う農業の発展に、農業土木技術者として微力ではありますが貢献したいと考えています。



次号は、竹内 毅さん（農業部門）



白旗 雅樹 農業部門（農業及び蚕糸）

勤務先：北海道立十勝農業試験場

私は農業機械を担当する研究職員として、北海道立の農業試験場に勤務しています。学生の時「農業物理学」講座に所属して、「農業気象」や「農業施設」に関連する研究に携わっていました。現在では農業機械の開発改良や効果的な利用技術について調査研究を行う業務を担っていますが、軸足を「農業物理」に据えて仕事を進めるようにしています。

「農業物理学」は「作物」や「雑草」に関わる生物学的な現象と、「土壌の物理性」や「微気象」、「農業機械による機械的作用」などの物理学的現象をつなぐインターフェイス的な分野で、「農業」と「工業」をつなぐ役割を果たしていると考えています。「優れた農業機械」とは「作物」や「雑草」の生理生態的特性に基づいた機能を持つ機械であり、利用する場面においても、これらの特性を最大限に生かすことが求められます。一例として、草丈1cm程度までの雑草に対して、覆土比で2～3という条件、すなわち草丈の2～3倍の厚さの土を雑草にかぶせることで、殺草率を90%以上とすることができるという試験結果が得られており、「除草機械」を利用する場面において、機械の調整の目安となっています。

この他、土壌の締め固め程度が作物の生育に大きく影響する現象、作物に対する接触刺激（作物をほうきなどで撫でる）が草丈を抑制する現象（機械的刺激により作物体内で植物ホルモンであるエチレンの生成が増加すると言われていています）など「農業物理学」のテーマは農家の畑の中で、宝のように眠っています。



次号は、大道雅之さん（農業部門）



山下 昌彦 建設部門（都市及び地方計画）

勤務先：日本データサービス株式会社 企画部 TEL：011-780-1121

私は、都市計画や住宅等の計画づくりに多く携わってきました。他の分野も少なからずあると思いますが、人口減少や少子高齢化、地方財政の逼迫などで、社会資本整備のあり方が変わってきており、なおかつ将来の見通しも立ちにくくなってきています。行政が発注するプロポーザル業務では、社会情勢の変化を踏まえ、これまでと違った新たな視点の政策的な課題解決、インフラ整備・社会構築のシナリオについて提案を求められることが多くなってきました。「お金もない、人もいない。そんな中で地域をいかに住みよく、元気にしていくか？」という命題に対し、情報を集め知恵を絞りながら応えていくのが現在の自分の使命だと感じ、日々の業務に邁進しています。

自分は生まれも育ちも札幌なので、もともと他の地域の住み良さなどを生活実感として把握している訳ではありませんでした。しかし、業務を通じて子どもからお年寄りまで、あるいは商店主や漁業・農業の関係者の方々大学の先生や自治体職員の方達と直にお話したり情報交換することで、「地域の方々の暮らして、こういう感じかな」というところが少しずつではありますが読めてきていると感じています。とはいってもまだまだ至らない点は多くありますので、これからも多くの方々との出会い、諸先輩の助言などもいただき、様々なことを学習しながら、技術士として社会に役立てるよう努力していきたいと思っています。



次号は、齋藤礼位さん（建設／農業部門）



遠藤 清武 建設・総合技術監理部門（道路）

勤務先：アルファ計画株式会社

技術士試験は平成8年に受験しました。夏の暑い日で試験終了直後、頭の中がグチャグチャになったように感じました。筆記試験では予想がはずれ、準備していなかった問題を1問回答しなければならず不合格と思っていたのですが、運良く合格しました。東京の面接試験では、かつて経験したことがないほどの緊張を覚えました。翌年の合格発表の日、新聞に自分の名前を見つけた時は本当に嬉しかったです。

技術士を受験したころは道路（舗装）会社に勤務していましたが、その2年後、現在の会社に入社しお世話になっています。通常の業務は入札、積算関係や照査、専門であるアスファルト舗装関連の業務（修繕等）を会社が受注した時には業務を担当しています。設計会社に移って気づいたことは、道路会社に勤務していた約20年、道路設計について全くと言っていいほど勉強していなかったし、その必要性も感じていませんでした。これではとても技術者とは言えません。その後、自分の未熟さや極端な知識不足を恥じる思いから、少しは知識も身に付けたと思います。舗装会社では辛く厳しいことも多かったのですが、現場の施工を担当した経験が今になって時々役だっています。

あれから十数年、建設業界を取り巻く環境は激変し、益々混迷を深めています。以前の職場にいた多くの仲間達も去っていきました。このような厳しい状況の中、70才、80才を過ぎても世の中に技術で貢献している先輩技術士をみると、尊敬の念とともに無理でしょうが、自分もかくありたいものだと思っています。



次号は、中里浩治さん（建設部門・道路）

エンジニアパーク

Engineer *Ring* Park



谷口 史一 水産部門（水産土木）

勤務先：北日本港湾コンサルタント株式会社

私は京都府の南端で生まれ、大学進学のために北海道に来ました。京都府での生活が18年、北海道での生活が16年と、早いものではほぼ同じ年数となってきました。

北海道では食べ物（特に水産物）がおいしいことにとても驚きました。

学生時代に、実家に帰省する数日前に『殻付きのホタテ』を贈ったことがありましたが、帰省してみるとホタテは殻付きのまままで放置されていました。なぜかというところ、両親は貝の剥き方が分からなかったとのこと。仕方がないので、全て自分で、それもテーブルナイフで剥きました（剥きにくい）。さすがに日数が経っていたので刺身は危険かなと思ってバター炒めにしましたが、それでもとてもおいしいと両親は喜んでくれました。

イクラも京都では瓶詰めのものでしか食べたことがなく、おいしいと思えなくてどちらかと言うと敬遠していました。しかし北海道では、買って来た筋子を自宅でバラして醤油漬けにし、それを食べてからはイクラがすっかり大好物になりました。

このように、北海道の水産物は『所変われば品変わる』という格言が意味をなさないくらい、日本中の方に『おいしい』という印象を与えていると言っても過言ではないと思います。私自身、これからもおいしい水産物を提供できる一助となれるよう、日々精進していきたいと思っています。



次号は、干川 裕さん（水産部門）



高島 正秀 建設部門（都市及び地方計画）

勤務先：北海道建設部住宅局建築指導課

建築職として道の職員になって、気が付けば四半世紀！ 振り返ると、十数年前に都市計画課に勤務した時に“都市プランナー”という言葉の響きにあこがれ、技術士を目指し、そしてなんとか取得。都市計画課では、住民参加による都市マスタ策定支援としてワークショップ研修を行ったり、田村明先生、延藤安弘先生、林泰義さんといった、日本のまちづくりや市民参加を牽引している方に講師お願いし講演会を開催したりしました。その後、有珠山周辺の災害復興対策に携わり、また胆振支庁の時には、北海道移住をテーマにフォーラムを企画、室蘭出身のNHKアナの高橋美鈴さんに特別講演をいただくなど、多くの方々の協力をいただき、まちづくり・地域づくりに関わりながら仕事に取り組んできたところです。

一昨年6月から現在の建築指導課勤務となり、耐震偽装問題の再発防止とした改正建築基準法と改正建築士法などを所管することになりました。改正建築基準法の施行後、日本全国で建築物の着工数が激減し、「官製不況」と大きな批判を浴びました。続く建築士法の改正では、法律を変えることはできませんが、円滑な法施行への取り組みといったことを進めているところです。建築基準法はその名のとおりに、建築基準を定めている法律ですが、一方で、例えば景観地区や地区計画といった地域を指定して、条例で建物の用途や形態などを定めることや、許認可を通じて良好な都市環境を誘導するといった、まちづくりのためのツールもあります。“都市プランナー”この言葉を意識しながら、日々仕事に取り組んでおります。



次号は、杉本英一さん（建設／総合技術監理部門）



高橋 宣之 建設(建設環境)・農業(農業土木)・応用理学・総合技術監理部門(地質)
勤務先：株式会社ズコーシャ 総合科学研究所 地質調査室

私は、海と山に囲まれた伊達市の小さな町に生まれました。実家は2000年に噴火した有珠山のふもとにあり、私自身も小学校1年生の時に噴火を経験しました。大学時代は室蘭市で過ごし、火山噴出物の侵食特性に関する研究をしていました。卒業後、縁あって現在の会社にお世話になって13年目になります。地質に関わる職業に就いたのも、幼少期に噴火を体験した影響なのかもしれません。

現在は、主に農業土木に関わる地盤調査・解析業務を担当しておりますが、最近では専門分野以外の幅広い課題に対応しなければならず、技術力とマネジメント力の更なる向上が必要と痛感している所です。恩師がコンサルタント出身だったこともあり、この業界で活躍するためには技術士の資格が必須であることは早くから意識していました。しかし、技術士補の試験に3度も不合格になり、“技術士なんて夢のまた夢”と落ち込んだこともありました。でも、諦めずに挑戦した結果が今につながっていると感じています。

さて、私には8歳と5歳のかわいい娘が2人おります。時々「ズコーシャって何している会社なの？」とか「お父さんはどんな仕事しているの？」と聞かれますが、なかなか上手に答えることができません。しかし、よく考えると、答えは単純なのかもしれません。「みんなが安心して暮らせる社会を作っていく仕事だよ」と胸を張って言えるように、今後も研鑽に努め、微力ながら北海道の発展に貢献していきたいと決意を新たにしております。



次号は、藤原充志さん（環境部門）



佐々木 悟 農業(農業土木)・総合技術監理部門

勤務先：北海道開発局 網走開発建設部 TEL：0152-44-6171

私は1966年(昭和41年)に秋田県で生まれ、高校生まで故郷で過ごした後に北海道にやってきました。1990年(平成2年)に旧北海道開発庁に入り、旭川、札幌、釧路などの勤務を経た後、現在に至っています。私が義務教育を受けていた時代、社会科の教科書には八郎潟の干拓事業や、根釧パイロットファームなど、我が国の農業基盤を形成した歴史的な農業土木事業が紹介されていました。当時の子供ながらの素直な感動が、現在の職業につながったものと思っています。

時代は変わり、農業土木事業の社会的意義は大きく変わりました。我が国の社会、経済は成熟し、基礎的な社会基盤の整備はほぼ行き渡りました。建設から維持管理へ、私たちの仕事の軸足も移りつつあります。その一方で、経済のグローバル化の中、食料供給の大半を海外に依存する状況に国民は大きな不安を抱えています。しかし食料の生産を支えてきた農村部では人口の減少が進み、地域社会の維持すら困難な状況になっています。農業生産基盤の維持は、安全保障上の緊急課題になりつつあると言えます。

このような時代に農業土木技術者としてどのように仕事をしていくべきか、自問自答を繰り返しています。将来の見通しにくい時代だからこそ、歴史に対する深い洞察に基づき、農業・農村の将来を展望し、後の世代の国民の評価に耐えられる、普遍性のある仕事をしていかななくてはならないと考えています。



次号は、堀田祐巳さん（機械部門）